

P2-046

医科と歯科が連携して口腔内管理を行った低ホスファターゼ症の3症例

大川 玲奈、仲野 和彦

大阪大学大学院 歯学研究所 小児歯科学教室

【緒言】

大阪大学歯学部附属病院小児歯科では、骨系統疾患専門外来を開設し、本学医学部附属病院小児科との連携のもと、歯科的症状を有する骨系統疾患罹患児の治療にあたっている。低ホスファターゼ症（HPP）は、組織非特異的アルカリホスファターゼ（ALP）遺伝子の変異によりALP活性が低下することで引き起こされる遺伝性代謝性疾患で、骨の石灰化障害が主症状として認められる。歯科的症状としては、セメント質の形成不全による乳歯の早期脱落を特徴とする。今回、我々は乳歯の早期脱落を主訴に歯科を受診したことによってHPPの診断に至り、医科と歯科が連携して口腔内管理を行った3症例について報告する。

【症例】

症例1：初診時4歳5か月の女兒。3歳3か月時に上顎右側乳中切歯、4歳5か月時に下顎右側乳中切歯が脱落した。本学医学部附属病院小児科において、歯限局型HPPと診断された。歯周状態の管理と口腔衛生指導を定期的に行い、最新の10歳3か月時の診査では、永久歯の動揺は認められなかった。

症例2：初診時1歳7か月の男児。1歳2か月時に下顎右側乳中切歯と下顎左側乳側切歯、1歳6か月時に下顎左側乳中切歯が脱落した。本学医学部附属病院小児科において、歯限局型HPPと診断された。2歳11か月時に下顎右側乳側切歯、4歳1か月時に上顎左側乳中切歯が自然脱落した。3歳11か月時に下顎、4歳3か月時に上顎の小児義歯の装着を行った。以後、調整および定期検診を繰り返し、最新の5歳9か月時まで良好な経過をえている。

症例3：初診時3歳3か月の女兒。2歳6か月時に下顎左側乳中切歯が脱落した。本学医学部附属病院小児科において、歯限局型HPPと診断された。3歳6か月時に、下顎右側乳中切歯の著しい動揺を認め、保存困難であったため抜歯を行った。3歳8か月時に小児義歯の装着を行った後に調整および定期検診を繰り返し、最新の5歳3か月時まで良好な経過をえている。

【考察】

今回の3症例は歯科的症状を契機に医科受診へとつながったことで、HPPの診断に至り、医科での全身的管理が可能となった。歯科医師に本疾患を啓発することによって、従来は骨痛などの全身的症状が起こるまで見過ごされてきた軽症型の発見につながり、医科での全身管理と積極的な歯科的介入といった連携医療が可能となると考えられる。

P2-047

唾液検査を導入した保育所、幼稚園歯科検診の取り組み

広瀬 弥奈、福田 敦史

北海道医療大学 歯学部 口腔構造・機能発育学系 小児歯科学分野

【目的】

本講座では、平成22年度より近隣保育所、幼稚園の歯科検診時に唾液検査を導入し、その結果を歯科検診結果とともに保護者に通知している。今回、本検査導入までの経過と現状、平成27年度の検査結果について報告するとともに、今後の課題について検討した。

【方法】

本学近隣保育所1施設（55名）、こども園1施設（153名）、札幌市内の幼稚園1施設（84名）を対象とし、保護者にはリーフレットを準備し、書面にて同意の得られた小児に対して行なった。唾液採取は歯科検診と並行して安静時・ガム刺激時唾液を各5分間、重量測定した試験管を用いて、朝9:30～11:00の間に実施した。実施後可及的早く、採取後の試験管重量を測定後、分泌量を算出した。pHと緩衝能は、チェックバフ™を用いて測定した。次いで、ミューカウント™を用いて唾液中のミュータンス数を測定した。検査結果は、1か月以内に各施設に郵送し、保護者に渡してもらうようにした。

【結果および考察】

各施設長と教職員に、子どもの口腔内環境を把握することによりう蝕リスクを予測することができることを丁寧に説明することで、比較的容易に唾液検査を導入することができた。年長児に対して、刺激時唾液の測定も行なっていたが、人数の多い施設では時間がかかり、現在では安静時のみの検査となった。

平成27年度の検査結果についてみると、対象である3歳以上の小児は292名であったが、安静時唾液分泌量が0.1 ml/min以下を示した者が47名と16%を占め、低年齢児ほどうまく唾液採取ができない傾向にあった。刺激時唾液分泌量は、52名中0.4 ml/min以下を示した者が5名であった。安静時唾液（n=246）のpHと緩衝能は各々7.47±0.34、5.63±0.72、刺激時唾液（n=52）は7.76±0.25、6.50±0.39であった。ミューカウント（n=262）の結果は、+++が27名（10.3%）、++が52名（19.8%）、+が70名（26.7%）、-が113名（43.2%）であった。唾液分泌量の信頼性には検討の余地があるものの、pHと緩衝能、ミューカウントの結果についてはう蝕リスクを把握してもらうためには十分意義のあるものと思われた。今後は、う蝕との関連を調査するとともに、生活環境や本結果に対する保護者アンケートを実施し、より有意義なものとなるよう努力していきたい。